

大学院医歯学総合研究科医歯学専攻
認知行動医学講座 眼科学分野

大野京子



や網膜剥離などの合併症を生じる病的近視に至ることが少なくない。さらに症状が進めば失明の恐れもあり、日本では失明原因の4位になっている。大野教授は近視のリスクを次のように指摘する。

「病的近視では、眼球の長さ（眼軸長）が伸びたり変形したりすることで、視神経や黄斑部網膜に様々な眼疾患を発症します。軽度の近視でも緑内障のリスクは3倍になります。先端近視センターでは、強度近視に伴う眼合併症の治療のほか、小児や軽中度の近視を進行させないための予防的治療や指導にも力を入れています」

**眼の美しさに魅了され
全画像の観察を日課に**

大野教授は、眼科医師として医療に従事するようになり、次第に眼球という臓器の美しさに魅了されたという。



大学院医歯学総合研究科医歯学専攻
認知行動医学講座 眼科学分野

大野京子 教授

おおの・きょうこ

1987年横浜市立大学医学部医学科卒業。医学博士。1990年に東京医科歯科大学眼科医員となり、米国ジョンス・ホプキンス大学留学などを経て2014年より現職。専門は、近視、眼底疾患、黄斑疾患。2016年に日本近視学会を立ち上げ、近視疾患診療のガイドラインの作成や、病的近視の研究・啓発活動などに取り組む。2019年5月に設立された先端近視センターのセンター長も務める。

「眼底を覗くと直接血管を診察できます。そんな世界を眺めるのが大好きでした。例えば、新人の頃は、五十音順に全ての患者さんのカルテを読み込んだり、撮影された眼底写真に目を通したりしていました。診察が終わった後に居残ってカルテや眼底写真を見る時間は、至福のひとつでした」

眼は美しいだけではない。視力は、健やかな生活を送る上で欠かせない重要な重要な機能だ。大野教授は、心に残る患者の手術を振り返る。

「その患者さんは、がんで闘病中に、眼の中にカビが生える病気を発症して失明してしまいました。そのため、闘病する気持ちも弱まってしまったのです。眼の手術をしたところ、奇跡的に再び視力を回復するまでに治癒しました。患者さんは涙を流して喜び、がん治療への意欲を取り戻してくれました」

診療は発見と驚きの連続。 今も毎週100人のカルテを見ています

教科書に書かれたことも自分で見るまで信じない

大野教授の診療のポリシーは、教科書に書かれていることや著名な先生の話であっても、自分の目で見るまで信じないこと。診療を通して目の前の患者から学ぶことが重要だと強調する。

「現在も毎週、強度近視外来に来る100人の患者さんのカルテは、全て見えています。診察をきっかけに、病態解明につながるヒントが見つかることもあり、発見と驚きの連続です」

大野教授は、臨床と並行して治療困難とされてきた病的近視の治療法確立に向けた研究にも取り組んでいる。変形した眼球後方を固めて変形しにくくしたり、患者さん自身の細胞を培養して眼球に貼り付けたりする研究だ。病的近視の早期診断、早期治療の確立に期待が高まっている。

進行すれば失明の恐れもある病的近視を専門に、近視治療に取り組む大野京子教授。膨大な画像やカルテと向き合い、診療を通して成長してきたと語る。



在外研究員としてジョンス・ホプキンス大学へ